

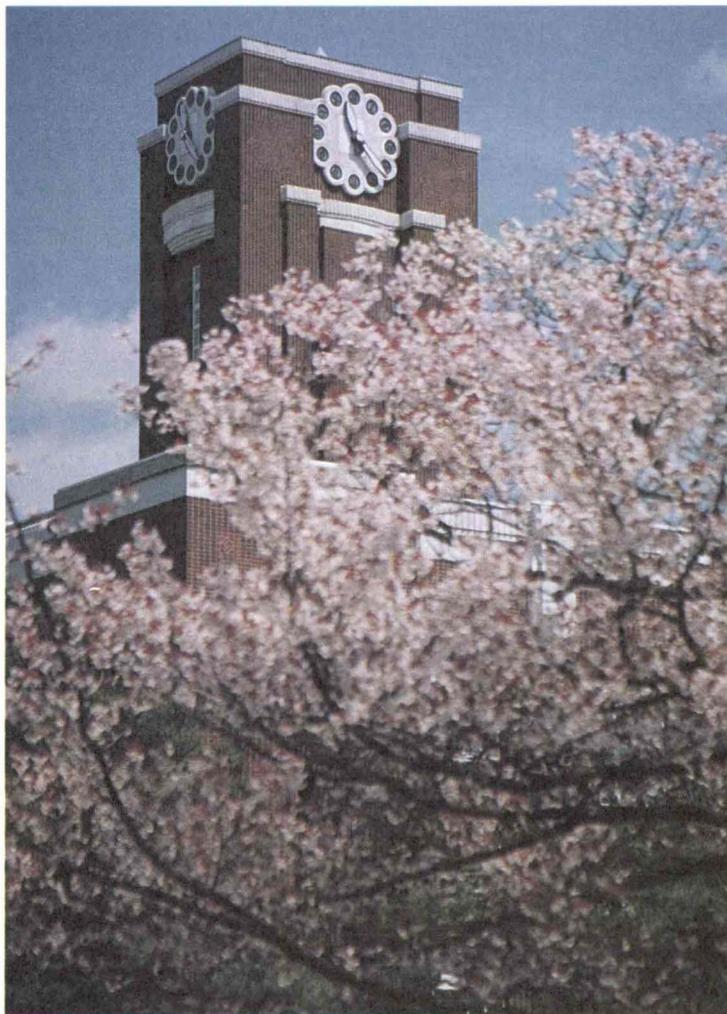
京大広報

No. 484

京都大学広報委員会

目次

修士学位授与式における
 総長のことば……………949
 卒業式における総長のことば……………951
 <大学の動き>
 平成7年度入学者選抜学力
 試験の結果……………954
 名誉教授称号授与式……………955
 医療技術短期大学部
 名誉教授称号授与式……………955
 平成7年度学部入学式……………956
 平成7年度大学院入学式……………956
 平成7年度医療技術短期大学部
 入学式……………957
 部局長の交替等……………957
 京都大学春秋講義
 (春季講座)の開講……………958
 <資料>
 平成6年度京都大学後援会
 助成金交付者一覧……………959
 平成7年度京都大学職員
 研修実施計画……………962
 一京都大学の百年(第8回)一
 吉田キャンパスへの道……………962
 計報……………963
 <部局の動き>
 平成7年文学部博物館特別公開展示……………965
 日誌……………965



改修された時計塔

<随想>
 戦後五十年の感想
 名誉教授 川出由己……………966
 <コラム>
 社会科学と専門性—差異を共通資産にする方法—
 池上 惇……………967

修士学位授与式における総長のことば

平成7年3月23日

総 長 井 村 裕 夫

本日ここに元総長、名誉教授の諸先生、各研究科長、教職員の御臨席のもと修士学位授与式を挙行し、それぞれの専攻にかかる修士の学位記をお渡しすることができましたことは、京都大学としてまことに喜びとするところであります。

本日修士の学位を得られた皆さんは、文学67名、教育学13名、法学53名、経済学32名、理学204名、薬学63名、工学644名、農学198名、人間・環境学111名、合計1,385名であります。このうちには社会人のための専修コースを終えた方が42名含まれています。大学院入学以来今日までの皆さんの御努力に心から敬意を表しますとともに、所期の目標を達成されたことに心からの祝福をお贈りしたいと思います。

皆さんの中には大学院の博士後期課程に進学し、あるいは研究機関に就職していよいよ本格的に研究者の道を歩む人もかなり多いと思います。また社会に出て、あるいは社会に戻って、今日までに学んだ専門知識を生かして活躍される方もかなり多いでありましょう。いずれにせよこれからの人生で知の創造に、あるいは継承に大きい役割を果たされることは疑いがありません。

20世紀の後半には学問の様々な分野が急速な発展を遂げました。その中でも特に進歩の著しい領域の一つに分子生物学を挙げることができでありましょう。今世紀前半、単なる概念上の存在でしかなかった遺伝子の本体がDNAであることが明らかとなり、やがて遺伝子の暗号が解読されました。そして遺伝子の暗号も、その暗号が読み取られて蛋白が生じるメカニズムも、全ての生物で基本的に同じであることが明らかとなりました。更に遺伝子の構造の研究が進み、細菌と人間の遺伝子の間でかなりの類似性があることも知られるようになりました。

このことは私どもにとって大きい驚きでありました。人間のような高等動物と細菌のようなプリミティブな生物の間で、遺伝子に類似性のあることなど、思いもよらなかったからであります。このことから生物の進化を遺伝子レベルで追究しようとする分子進化学、あるいは進化遺伝学とも言うべき新しい研究分野が急速に発展してきました。この分野で大きい業績を残された我が国の学者があります。昨年11月惜しくも逝去された木村資生博士であります。

木村博士は京都大学理学部の出身で植物学を専攻され、卒業後、ムギの進化の研究で有名であった木原均博士のもとで遺伝学の研究に従事された後、終生を静岡県三島の国立遺伝学研究所で過ごされました。先生は、1930年代から発展した集団遺伝学に関心を持ち、この分野で優れた業績をお挙げになりました。そして1968年に「分子進化の中立説」を提唱し、進化論に大きい一石を投げられたのであります。先生の業績を簡単に紹介しながら、学問の流れと学者のあり方について若干考えてみたいと思います。

進化論の歴史の中で最も大きい業績を挙げたのは言うまでもなくチャールス・ダーウィンであります。ダーウィンは有名な著書『種の起源』の中で、生物の進化を説明する原理として自然淘汰という概念を提唱しました。これは生存競争に有利な変異が保存され、有害な変異が除去されることによって、すなわち自然淘汰によって生物は進化してきたという考え方であります。

今日では広く受け入れられているこの考え方も、当初はかなり激しい議論にさらされました。とくに

今世紀初頭、メンデルの遺伝の法則が再発見されて以来、進化論とメンデル学派の葛藤は激しいものとなりました。しかしやがてモーガンらによるショウジョウバエの突然変異に関する研究が進み、突然変異のうちには表現効果の少ないものが存在することが明らかになって、遺伝の法則と進化が矛盾するものでないことが理解されるようになりました。そこで、ダーウィンの理論をメンデルの遺伝学に基づいて説明しようとする集団遺伝学が生まれ発展しました。それは集団の中での遺伝子頻度の変化を確率論的に扱う理論的な研究分野であります。このようにして、「ネオ・ダーウィニズム」と呼ばれる進化総合説が次第に力を得、自然淘汰万能とも言える進化学説に疑いをはさむものはほとんどない状態となりました。木村先生が学界に登場されたのはこのような時代であります。

1960年代に入りますと、2, 3の蛋白で動物の種によるアミノ酸配列の相違が明らかになり、進化の速度を知ることができるようになりました。いわゆる分子時計と名付けられた現象であります。木村博士はそれまでに研究してこられた集団遺伝学の確率理論で、この分子レベルの変異を検討されました。その結果、淘汰には良くも悪くもない中立的な突然変異の偶然的固定によって、分子レベルの進化を説明するのが合理的であるという結論に到達されました。そして、1968年 Nature 誌に「分子レベルでの進化率 Evolutionary rate at the molecular level」という論文を発表されました。これが中立説と呼ばれるものであります。先生は後に刊行された著書の中で、中立説を「分子レベルでの進化的変化、すなわち生物の種に固有な遺伝物質それ自身の変化を引き起こす主要な要因は正のダーウィン淘汰ではなく、淘汰に中立なまたはほとんど中立な突然変異遺伝子の偶然的固定である。」と説明しておられます。

この先生の中立説は欧米の自然淘汰学派から激しい反論を受けました。しかし先生はこの反論に対して論争を挑まれ、10年程にわたって激しい淘汰説と中立説の対立が続きました。それは欧米で神のごとく信じられていたダーウィンへのある意味での挑戦であったからです。1970年代になって遺伝子に関する研究が進み、塩基レベルで集団内の多数の個体についてのデータが得られるようになって次第に分子進化の中立説を支持する知見が集積されました。とくに偽遺伝子における高度な変異は、機能を有しない遺伝子だけに淘汰論では説明できないものであります。そして木村先生は、中立説に最も激しい批判をしたイギリスから、1993年進化論のノーベル賞とでも言うべきダーウィン・メダルを受賞されました。この時、イギリスの進化論学者で初めは中立説に反対であったメイナード・スミスは、「進化においてダーウィンのでないプロセスの重要性をわれわれに納得させた人物にこのメダルが贈られるのは、いささか皮肉なことかもしれません。しかしダーウィン自身は承知しただろうと私は確信します。」と述べたそうです。イギリスのフェアな科学的精神がよく現われた言葉であると思います。

木村先生の偉いところは、当時誰も信じて疑わなかったダーウィンの淘汰説に自らの数学的理論をもとにして疑いを持ち、全く新しいパラダイムを打ち出されたことと、激しい批判によく耐えて中立説を支持する知見を集められたこととであります。パラダイムの転換を促すような理論を構築することは、日本人には一般に苦手のように思いますが、小さい時から納得するまで自分で考えられたという先生の御性格と、優れた数学的才能によって革新的な学説が生まれたものと思います。

木村博士は、十分検討された自らの研究成果には自信を持つべきこと、そして場合によっては不動の真理と考えられている学説にも挑戦すべきことを私どもに教えられたように思います。先生の中立説は遺伝子レベルの進化を見事に説明できますが、表現形質のレベルの進化との間にはまだ埋めなければならない溝があります。先生は、これからの若い人々が中立説に思い切ってチャレンジして、未開の領域が開かれることを望んでおられるであります。

修士の学位授与式にあたり、京都大学が生んだ偉大な先達の業績を偲び、皆さんへの餞けの言葉としたいと思います。

卒業式における総長のことば

平成7年3月24日

総 長 井 村 裕 夫

明るい春の陽差しに、空も山々も青さを甦らせて参りました。青は春の色、物事の始まりの色、そして明るさを象徴する色であります。青は京都大学のスクール・カラーであります。今喜びに包まれて学窓を巣立とうとする諸君に最も相応しい色でもあると言えましょう。

本日は元総長、前総長、名誉教授の諸先生、各学部長、教職員の方々の御臨席のもと平成6年度卒業式を挙行し、文学228名、教育学76名、法学417名、経済学272名、理学291名、医学125名、薬学78名、工学904名、農学296名、合計2,687名の諸君にそれぞれの専攻にかかる学士の学位を授与することができましたことは、京都大学としてまことに喜びとするところであります。小学校入学以来16年、医学部の場合は18名、更にそれ以上の長い学業生活を終えて、今諸君は人生のスタート台に立とうとしています。このスタート台から、青く大きい空に思い切り飛び立って下さい。諸君のこれからの人生が幸い多いものになることを祈り、心からのお祝いを申し上げます。

先程私は2,687名の諸君に学士の学位記をお渡ししたと申しました。しかしその中には残念ながらこの卒業式にどうしても出席できなかった人が一人含まれています。それは去る1月17日の阪神大震災で亡くなった文学部の山中祥子さんであります。山中さんは既に単位を全て取得し、卒業論文も提出していましたので、文学部教授会は合格と判定し、本日学位記をお渡しすることができました。おめでたい卒業式の中の唯一つの悲しい出来事ではありますが、山中さんは諸君の同窓の一人として永久に心の中で生き続けるであります。

阪神大震災は、改めて我々の生活がいつ危機にさらされるかわからないことを警告してくれました。考えてみれば我々が踏みしめている大地、揺るぎないと考えられるこの大地も、長い時間の物差しで見れば極めてダイナミックに変化するものであることが、よく知られています。地球上の生命は、その長い歴史の中で様々な天変地異に遭遇しながらも、生き残ってきたわけであります。もちろん、大きい自然の災害は頻度としては低いものでありますが、いつ起こるかわからないことを今回の地震は教えてくれました。

しかし、我々の生活を脅かす危機は天災のみではありません。局地的な戦争は世界のどこでも起こりうる可能性がありますし、そうなる多くの難民が生まれます。人口の爆発的な増加によって食糧の不足、天然資源の欠乏、自然の破壊、環境の汚染が起こる可能性も考えられます。こうした人為的な災害もいつ我々を襲うかはわかりません。どのような危機が訪れても緊急に対応できる対策を平素から確立しておくことの必要性を私どもは地震で学びました。

今年は第二次世界大戦が終わって丁度50年という節目の年であります。この50年は我が国にとっては、明治以来、すなわち我が国が近代化を始めてから、最も平和で安定した時期でありました。この間、世界の各地で局地的な紛争は頻発しましたが、その中であって、我が国は敗戦により焦土と化した国土を復興し、経済の発展に全力を挙げることができました。そして、世界有数の高度工業国へと発展したのであります。

この戦後50年の安定と成功が多くの日本人にある種の錯覚を持たせることになったと思えてなりません。例えば、経済は常に右上がりに成長し、収入は増え続け、土地も株も若干の変動はあっても値上が

りするという神話が生まれました。雇用は終身制で、年功序列によって給与も地位も上昇することも我が国では不変の常識と考えられるようになりました。それらが高度経済成長以後のことであることを人々は忘れてしまったと言えましょう。そして、多くの人々がより安定した生活を求めて大企業や官庁への就職を希望し、より良い就職口を得ようとするため大学入試は一層激化しました。政治、行政、産業、大学などすべての分野で長く勤めることが昇進の道となり、分野を越えての人材の交流が著しく少なくなって参りました。我が国が陥ったある種の閉塞状況は、戦後の経済成長と安定がもたらした、いわば“安定神話”によるものでありましょう。

戦後の経済発展と安定は、また“安全神話”も生み出したように思います。都市は画一的に近代化され、伝統的な文化も、地域のコミュニティが持っていた人と人とのつながりも著しく稀薄になってしまいました。しかし、近代的な建築や道路は従来都市に比べてはるかに安全であると私たちは信じていたように思います。しかし、今回の震災は天災や人災がいつ起こるかかわからないこと、それに対する備えが必要であることを私たちに警告しただけでなく、上に述べたような社会システムに関する“神話”についても、再考を求めていると言ってよいでありましょう。それと同時に、震災は経済的な繁栄の中で見失いそうになったものを私たちに思い起こさせてくれました。物質的な繁栄は一朝にして崩壊すること、そうした時に最も大切なことは善意に基づいた人々のつながりであることを学んだように思います。多くのボランティアの人々の活躍は、暗く悲惨な災禍の中での心温まる燈火でありました。京都大学が義援金を集めていることを知ったアメリカの交流協定校ブラウン大学が義援金を送ってくれたことも国境を越えた人々の善意を示した嬉しい出来事でありました。

時代は今、安定から変動へと大きく変わろうとしています。社会主義諸国の崩壊後、新しい国際政治体制はまだ生まれていないように思われます。経済も、大量生産・大量消費の時代が終わりを告げ、ポスト工業化社会に移行しつつあります。我が国の保有するロボットの台数が減少しつつあることはこのことを示しているのでありましょう。アジア諸国は急速な経済発展を遂げつつあり、我が国の経済の空洞化が憂慮されています。そして、工業の発展による環境破壊も対策を迫られている大きい課題であります。

このような変革の時代にこそ、諸君のような若い人々の力とエネルギーが必要であります。諸君の多くは大企業や官庁に就職し、また大学院に進学して学問を続けることでありましょう。いずれの道に進んでも、大樹の蔭に安住することなく、時代が変革期であることを十分認識して、常に自己啓発を続けて下さい。また必要とあれば灼熱の大地を一人で歩む勇気と気概を持って欲しいと願っています。

昨年京都は建都1200年を迎え、様々な行事が行われました。その中で、私どもは今から100年前、建都1100年の頃の京都を改めて思い起こしました。その頃の京都は明治初年首都が東京に移ったことによって起こった衰微から漸く立ち直ろうとしている頃でありました。その時起死回生の役割を果たしたのは琵琶湖からの運河、すなわち疏水の完成であり、それは建都1100年の4年前のことでありました。琵琶湖疏水によって京都は安定した水を得ることができ、水力発電を可能にして日本に初めての市電を走らせることに成功しました。この大事業には多くの人々が関わりましたが、とくに京都府知事北垣国道と、技師田辺朔郎の力が大きかったと思います。

北垣国道は兵庫県（但馬国）養父郡の豪農の家に生まれました。恵まれた少年期を過ごしましたが、彼も時代の子でありました。豊かな環境を飛び出して、幕末の変動期に尊王倒幕運動に加わり、様々な辛酸をなめて明治維新を迎えました。その後、明治政府の官吏となり、明治14年から25年まで京都府知事をつとめ、疏水事業を成功させました。この北垣知事は京都大学とも深い関係があります。というのは、明治22年大阪にあった第三高等中学校（後の第三高等学校、京都大学教養部）を京都に移転する誘致運動に成功しましたが、この学校が京都にあったからこそ、我が国第二の帝国大学が明治30年京都に

創設されたのであります。

北垣は明治人らしい気骨を持った人物でありました。彼は44歳で京都府知事に就任すると、すでに前任者の時代から計画されていた琵琶湖疏水事業を実行することを決断しました。そして様々な困難を乗り越えて事業を成功に導きましたが、その中で北垣はいくつかの重要な決断をしています。それはこの大事業を、もちろん政府の援助を受けましたが、京都府の事業としたことです。彼はこの事業を京都府民全体が力を合わせて成功させることにより、京都が発展する基礎ができるものと考えました。そのため京都府民に当時の金で65万円にもものぼる負担を求めましたが、これは現在の貨幣価値では4,000億円を越えると推定されています。赤ん坊も含めて府民一人当たり200万円という大金であります。

第二にこの大事業のため、工部大学校（後の東京大学工学部）を卒業したばかりの若干21歳の田辺朔郎を主任技師として採用しました。そしてオランダ人のお雇外国人技師も困難であるとして賛成しなかったこの大事業に挑んだのであります。大変な決断であったと言えましょう。北垣は「意気雲の如くあれ」という書を残していますが、この書は疏水事業に対する彼の意気込みを示しています。

田辺朔郎は学問をもって江戸幕府に仕えた家柄の出で、1861年に生まれました。明治になって父の死により実家は経済的に困窮しましたが、工部大学校に進学します。そして、卒業論文の実地研究のため明治14年京都に参りました。大津から京都まで現場を歩いて、途中で怪我に悩まされたりしながらも「琵琶湖疏水計画」をまとめ上げました。右手の指に怪我をしたために左手で図面を書き上げたと言われていたので、極めて強固な意志と負けじ魂を持っていたと思われれます。南禅寺の疏水べりに「琵琶湖疏水記念館」が建っています。そこに行きますと、北垣国道、田辺朔郎の資料が残されており、疏水開通という大事業の一端を偲ぶことができます。まだ見ていない人は、一度是非訪ねて先人の努力と気概に触れてみて下さい。「琵琶湖疏水記念館」に、田辺が調査した時のノートが残っていますが、内容は全て英語であり、彼の緻密さを示すきれいな図が書かれています。またその表紙には It is not how much we do, but how well, The will to do, the soul to dare. と書かれており、彼の意気込みが感じられます。

その後、田辺は様々な困難に直面しながらもこれを克服し、トンネルを成功させて難事業を完成させました。工部大学校でいかに優れた教育を受けたとは言え、20歳代の青年がこの難事業を成功に導いたのですから、それは驚嘆に値することです。しかも、水力発電が始まっていることを知った田辺はアメリカに調査に赴き、コロラド州のアスピンの水力発電を見学します。そして、水車を利用するという当初の予定を変更して蹴上に我が国初の水力発電所を完成させました。これは我が国で初めての事業用水力発電所でもありました。田辺の進取の精神が見事に花開いたと言うことができましょう。

田辺朔郎は疏水完成の後、東京帝国大学教授、北海道鉄道建設部長を経て、明治33年京都帝国大学工科大学教授に就任し、土木工学教室の発展に盡力するとともに、工科大学長（工学部長）も歴任して京都大学のために大きい貢献をしました。

明治という時代は我が国がかつて経験した最も大きい変革の時代でありました。その変革は、疑いもなく若い人々の力と情熱でなされたものであります。それは日本人の精神が沸騰するように高揚した時代でもありました。それなればこそ、20歳代の田辺青年に疎水という大事業が委ねられ、それが見事に成功したのでありましょう。

諸君が活躍する21世紀、それは現代文明が様々な困難に直面するであろうという負の側面を私は少し強調し過ぎたかも知れません。しかし、基本的人権を何よりも尊重し、自由と民族の自決を認めた現代文明には、過去のどの文明も持ち得なかった正の側面があります。近代文明の負の側面を直視し改革することにより、正の側面を一層充実発展させることが諸君に課せられた課題でありましょう。これからの諸君の人生が実り多いものであることを祈念して私の祝詞と致します。

〈大学の動き〉

平成7年度入学者選抜学力試験の結果

平成7年度入学者選抜学力試験(第2次学力検査)の前期日程試験は、2月25日(土)・26日(日)に、後期日程試験は、3月13日(月)・14日(火)に、兵庫県南部地震による特例入試は、3月30日(木)・31日(金)に実施した。学部別の受験者数、合格者数及び入学者数等は次表のとおりである。

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	(C) 倍率 (B/A)	(D) 第1段階選 抜合格者数	(E) 受験者数	(F) 倍率 (E/A)	(G) 欠席者数	(H) 欠席率 (%)	(I) 合格者数	(J) 追加合 格者数	(K) 入学者数
総合人間学部	130人	人		人	人		人		人		130人
前期 文系	55	210	3.8	201	198	3.6	3	1.5	57		
前期 理系	55	268	4.9	259	254	4.6	5	1.9	55		
後期	20	420	21.0	302	182	9.1	120	39.7	22		
文学部	220										224
前期	190	725	3.8	665	663	3.5	2	0.3	193		
後期	30	442	14.7	282	137	4.6	145	51.4	31		
教育学部	60										63
前期	40	179	4.5	159	158	4.0	1	0.6	42		
後期	20	151	7.6	144	95	4.8	49	34.0	21		
法学部	400										408
前期	340	1,028	3.0	1,028	1,015	3.0	13	1.3	345		
後期	60	644	10.7	546	237	4.0	309	56.6	64		
経済学部	240										241
前期 一般	160	592	3.7	592	580	3.6	12	2.0	161		
前期 論文	50	324	6.5	251	239	4.8	12	4.8	51		
後期	30	520	17.3	398	251	8.4	147	37.0	35		
理学部	326									2	326
前期	294	989	3.4	960	948	3.2	12	1.3	294		
後期	32	1,266	39.6	1,236	830	25.9	406	32.8	32		
医学部	100										102
前期	90	414	4.6	414	395	4.4	19	4.6	92		
後期	10	334	33.4	300	205	20.5	95	31.7	12		
薬学部	80										85
前期	70	222	3.2	222	209	3.0	13	5.9	74		
後期	10	169	16.9	169	93	9.3	76	45.0	12		
工学部	1,050										1,051
前期	940	2,729	2.9	2,722	2,676	2.8	46	1.7	940		
後期	110	1,530	13.9	1,527	827	7.5	700	45.8	117		
農学部	315										325
前期	252	755	3.0	755	743	2.9	12	1.6	263		
後期	63	679	10.8	679	425	6.7	254	37.4	64		
小計	2,536	8,435	3.3	8,228	8,078	3.2	150	1.8	2,567		
後期	385	6,155	16.0	5,583	3,282	8.5	2,301	41.2	410		
計	2,921	14,590	5.0	13,811	11,360	3.9	2,451	17.7	2,977	2	2,955

(注) 1. 受験者数・欠席率は最終教科のものである。

2. 法学部(後期)と経済学部(後期)には、外国学校出身者のための選考試験の募集人員20名以内と10名以内、志願者52名と41名、第1次選考合格者34名と27名、受験者23名と25名、欠席者11名と2名、合格者14名と12名、入学者13名と7名がそれぞれ含まれている。

3. 特例入試の実施結果(外数)

学 部	受入人員	申請者数	受験者数	欠席者数	合格者数	入学者数
法学部	若干名	1	0	1	0	0
工学部	若干名	2	2	0	1	1

名誉教授称号授与式

4月6日(木)午前10時30分から、名誉教授称号授与式が、京大会館において挙行された。授与式は、部局長の臨席のもとに行われ、称号授与のあと、「総長のあいさつ」があって、午前11時10分終了した。

称号を授与された方は、次の42名である。

(敬称略)

(氏 名)	(推 薦 部 局)
山田 慶 兒	(人 文 科 学 研 究 所)
入 矢 義 高	(文 学 部)
杉 田 信 之	(化 学 研 究 所)
星 野 聰	(大 型 計 算 機 セ ン タ ー)
川 崎 辰 夫	(綜 合 人 間 学 部)
櫻 井 健 郎	(工 学 部)
清 水 善 三	(文 学 部)
手 塚 泰 彦	(生 態 学 研 究 セ ン タ ー)
田 中 禮	(綜 合 人 間 学 部)
小 野 山 節	(文 学 部)
岨 中 達	(教 育 学 部)
岡 村 圭 造	(農 学 部)
中 村 哲	(経 済 学 部)
梅 村 勲	(工 学 部)
稲 葉 宏 雄	(教 育 学 部)
清 永 敬 次	(法 学 研 究 科)
嶋 本 讓	(工 学 部)
中 西 浩 一 郎	(工 学 部)
村 上 浩 二	(農 学 部)
一 瀬 英 爾	(工 学 部)
中 川 博 次	(工 学 部)



(氏 名)	(推 薦 部 局)
山 川 裕 巳	(工 学 部)
若 松 貴 英	(工 学 部)
磯 江 景 孜	(綜 合 人 間 学 部)
朝 尾 直 弘	(文 学 部)
渡 部 良 久	(工 学 部)
佐 道 健	(農 学 部)
柴 野 昌 山	(教 育 学 部)
佐々木 光	(木 質 科 学 研 究 所)
人 見 勝 人	(工 学 部)
旦 代 晃 一	(綜 合 人 間 学 部)
田 中 昌 人	(教 育 学 部)
佐 伯 浩	(農 学 部)
中 川 一 郎	(理 学 部)
柴 田 徹	(工 学 部)
三 浦 精	(工 学 部)
高 橋 幹 二	(原 子 エ ネ ル ギ ー 研 究 所)
山 田 浩 之	(経 済 学 部)
玉 垣 良 三	(理 学 部)
山 田 康 之	(農 学 部)
高 谷 好 一	(東 南 ア ジ ア 研 究 セ ン タ ー)
木 崎 喜 代 治	(経 済 学 部)

医療技術短期大学部 名誉教授称号授与式

4月7日(金)午前9時30分から、医療技術短期大学部名誉教授称号授与式が、本短期大学部会議室において挙行され、上羽康夫元教授に称号が授与された。

授与式は、称号授与のあと、「学長のあいさつ」があり午前9時40分に終了した。

(医療技術短期大学部)

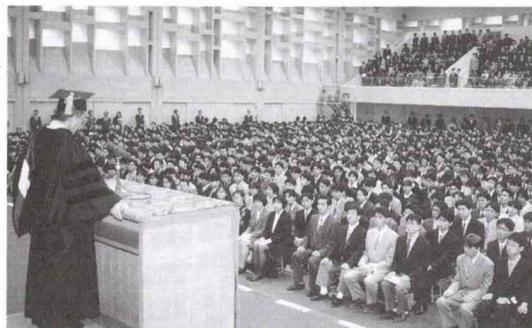


平成7年度学部入学式

4月11日(火)午前10時から、平成7年度学部入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は、学歌斉唱(京都大学音楽部交響楽団及び京都大学合唱団が協力)に続いて、「総長のことば」があり、午前10時30分に終了した。

今年度の新入生数は、次のとおりである。



学 部	募集人員	入学者数	外国人留学生数			第3学年 編入学者	再入学者	計	合 計
			国 費	私 費	計				
総合人間学部	130 ^人	130 ^人	3 ^人		3 ^人				133 ^人
文 学 部	220	224	1		1	9		9	234
教 育 学 部	60	63	1		1	5		5	69
法 学 部	400	408	2		2	8	1	9	419
経 済 学 部	240	241		7	7	10		10	258
理 学 部	326	326							326
医 学 部	100	102							102
薬 学 部	80	85	1		1				86
工 学 部	1,050	1,052	3	6	9	11		11	1,072
農 学 部	315	325							325
合 計	2,921	2,956	11	13	24	43	1	44	3,024

法学部と経済学部には、外国学校出身者のための選考試験による入学者13名と7名とが、それぞれ含まれている。

平成7年度大学院入学式

4月11日(火)午後3時から、平成7年度大学院入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は、学歌斉唱(京都大学音楽部交響楽団及び京都大学合唱団が協力)に続いて、「総長のことば」があり、午後3時20分に終了した。

今年度の大学院入学及び進学状況は、次のとおりである。



研究科	修士課程入学者数				博士(後期)課程入学者数									
	入学者	外国人留学生		合計	編入学者 (転入 学者)	外国人留学生		再入 学者	小計	進学者 (入学者)	外国人留学生		小計	合計
		国費	私費			国費	私費				国費	私費		
文学研究科	90	2	3	95	3	3	4		10	48	1	2	51	61
教育学研究科	29		4	33						11			11	11
法学研究科	61	3	9	73				1	1	13		5	18	19
経済学研究科	42	2	14	58	2	1	2		5	19	1	5	25	30
理学研究科	267	4	2	273	25	6	2		33	124		5	129	162
医学研究科										125	4	10	139	139
薬学研究科	61			61	1		3		4	18			18	22
工学研究科	719	9	30	758	33	4	7		44	84	3	6	93	137
農学研究科	203	6	5	214	21	5	6		32	59	10	3	72	104
人間・環境学 研究科	119	3	1	123	2		1		3	61		1	62	65
合計	1,591	29	68	1,688	87	19	25	1	132	562	19	37	618	750

平成7年度医療技術短期大学部 入学式

4月7日(金)午前10時から、平成7年度医療技術短期大学部入学式が、名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに本短期大学部講堂において挙行された。

入学式は、学長式辞、来賓祝辞があつて、午前10時30分終了した。

今年度の新入生数は、看護学科80名、衛生技術学科40名、理学療法学科20名、作業療法学科20名、助産学特別専攻20名の計180名であつた。

(医療技術短期大学部)

部局長の交替等

原子炉実験所長

西原英晃原子炉実験所長の任期満了に伴い、その後任として前田 豊原子炉実験所教授(放射線物性研究部門担当)が4月2日原子炉実験所長に任命された。任期は平成9年4月1日までである。

生態学研究センター長

川那部浩哉生態学研究センター教授(温帯生態研究部門担当)が4月12日生態学研究センター長に再任された。任期は平成8年3月31日までである。

京都大学春秋講義（春季講座）の開講

本学では、財団法人京都大学後援会の協力の下に、下記のとおり「京都大学春秋講義（春季講座）」を開講する。

本学教職員並びに学生については、各講義とも特別受講枠（無料）30名を設けているので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へ申し込むこと。

記

☆月曜講義（5回シリーズ）メインテーマ『都市と環境』

開 講 日	講 師	テ ー マ
5月15日	防災研究所教授 安藤雅孝	地震との共生
5月22日	工学部教授 小林正美	地震と都市デザイン
5月29日	防災研究所助教授 林春男	危機管理としての都市防災
6月5日	教育学部教授 山中康裕	大都市災害とところの健康 —阪神・淡路大震災の教訓—
6月12日	防災研究所教授 亀田弘行	都市地震防災の最前線
定 員	150名	
受 講 料	6,000円（全講義を通しての受講料です。）	

☆水曜講義

開 講 日	講 師	テ ー マ
5月17日	人間・環境学研究所教授 海原徹	教育の原風景 —松下村塾の人間形成—
5月24日	木質科学研究所教授 高橋旨象	シロアリ・木材・環境
5月31日	名 誉 教 授 小野山節	古墳時代の年代の決め方
6月7日	理学研究科教授 齋藤軍治	電気の流れる有機物 —有機半導体から有機超伝導体—
6月14日	人文科学研究所教授 荒牧典俊	釋迦の言葉と佛弟子の言葉
定 員	各講義 各150名	
受 講 料	各講義 1,200円	

○会 場 法経第二教室

○時 間 午後6時30分～8時30分

○申込締切日 4月28日（金）

○申 込 方 法

① 月曜講義、水曜講義の別々に往復はがきで下記の申込先へ申し込むこと。申込はがきには、住所・氏名・電話番号を記入すること。なお、水曜講義の場合は受講希望日を必ず記入すること。返信はがきにも住所・氏名を記入すること。

② 受講料は、受講決定通知を受領後、指定の口座へ振り込むこと。支払後の受講料は返金しない。

○受講資格は問わない。

○申込み・問合せ先 庶務部研究協力課研究協力掛（内線2041）

<資料>

平成6年度京都大学後援会助成金交付者一覧

京都大学後援会助成事業検討委員会で決定した平成6年度第1類（国際交流事業関係）助成金交付者は、第1種（海外派遣）47名、第2種（海外からの学者招へい）10名、第4種（大学行政上の渡航）5名及び第4種（大学間協定校との交流）4名・1件で、それぞれ次のとおりであった。

1. 第1類第1種（海外派遣研究員）

本学教官が専攻する学問分野等について調査研究のため、海外に派遣される場合に、助成金（往復航空賃及び滞在費）を交付するもので、派遣区分は、若手研究者・長期（10カ月）、若手研究者・国際研究集会及び1カ月である。

派遣区分	所属部局	職名	氏名	派遣国 (地域)	研究題目 (国際研究集会等名)		
若手 国際 研究 集会 者	長期	理学部	助手	池田隆介	アメリカ合衆国	超伝導体の渦糸状態に関する研究	
		医学部	講師	瀬上夏樹	オーストラリア	顎関節における診断的ならびに治療的関節鏡視法の確立に関する研究	
		経済研究所	講師	下村研一	アメリカ合衆国	経済行動における競争と協力に関する研究	
	長期	総合人間学部	助教授	北山忍	アメリカ合衆国	児童発達研究学会隔年定例会	
		理学部	助手	下林典正	イタリア	第16回国際鉱物学連合総会	
		医学部	講師	豊國伸哉	オーストラリア	第7回国際フリーラジカル研究会議	
		医学部	助手	逢坂光彦	香港	第20回国際病理アカデミー会議	
		薬学部	助手	根岸学	イタリア	第9回プロスタグランジン類国際会議	
		工学部	助手	神野郁夫	モロッコ	第6回放射線物理学国際シンポジウム	
		工学部	助手	宮路史明	フィンランド	第7回医用セラミックス国際シンポジウム	
		工学部	助教授	木村健二	アメリカ合衆国	第10回イオンと表面の非弾性衝突に関する国際研究集会	
		工学部	助手	北川敏一	イタリア	第12回物理有機化学会議	
		工学部	助手	田中庸裕	ドイツ連邦共和国	第8回X線吸収微細構造国際会議	
		工学部	助手	吉川耕司	アメリカ合衆国	設計における信頼性と質に関する第2回ISSAT国際会議	
		工学部	助手	古谷栄光	アメリカ合衆国	第33回意志決定と制御に関するアメリカ電気電子学会会議	
		長期	農学部	助手	永尾雅哉	ドイツ連邦共和国	第3回エリスロポエチンの病態生理学および薬理学に関する国際レビューベック会議
			農学部	助教授	河田照雄	カナダ	第7回国際肥満学会及びサテライトシンポジウム
			農学部	助教授	守屋和幸	カナダ	第5回世界家畜遺伝育種学会
			農学部	助教授	三芳秀人	スペイン	第8回ヨーロッパ生体エネルギー研究会
			農学部	助教授	山田雅保	カナダ	国際胚移植学会1995年次総会
			基礎物理学 研究所	助教授	横山順一	アメリカ合衆国	一般相体性理論に関する第7回マーセルグロスマン会議
		長期	ウイルス研究所	助手	秋山芳展	アメリカ合衆国	熱ショックタンパク質と分子シャペロンの生物学
	数理解析研究所		助手	阿部光雄	アメリカ合衆国	一般相体性理論に関する第7回マーセルグロスマン会議	
	数理解析研究所		教授	岡本久	ドイツ連邦共和国	流体中の非線形波動の構造と力学国際研究集会	
	超高層電波 研究センター		助教授	大村善治	アメリカ合衆国	米国地球物理学学会1994年春季大会	

派遣区分	所属部局	職名	氏名	派遣国 (地域)	研究題目 (国際研究会等名)
1 月	総合人間学部	教授	小 畠 啓 邦	連合王国・フランス・アイルランド	英米の紀行文学研究
	総合人間学部	助教授	河 崎 靖	ドイツ連邦共和国	中世低地ドイツ語書記法に関する研究
	教育学部	教授	天 野 正 輝	連合王国	英国における大学入学者選抜方法の「多様化」の特徴
	教育学部	教授	岡 田 渥 美	アメリカ合衆国・連合王国・フランス・オランダ・ドイツ連邦共和国・オーストリア・イタリア	大学教授法 (Staff development) の研究開発
	経済学部	教授	近 藤 文 男	アメリカ合衆国	アメリカにおける日本の民生用電子企業の製品とチャネル戦略について
	経済学部	講師	佐 藤 進	香港 中華人民共和国	留学の経済的動機に関する研究 —現代中国における経済と教育(留学)の相互関係—
	理学部	教授	鎮 西 清 高	ドイツ連邦共和国	生物硬組織の軽量構造とその適応的意義
	医学部	助教授	加 藤 伸 郎	アメリカ合衆国	カルシウムによるシナプス可塑性調節
	医学部	助教授	森 千 里	アメリカ合衆国	1) 精子形成過程に特異的に発現する遺伝子及び 2) 形態形成におけるアポトーシスの役割に関する研究
	薬学部	助教授	渡 部 好 彦	アメリカ合衆国	癌の遺伝子治療に関する研究
	工学部	助手	奥 村 幸 久	フランス	膜融合誘起脂質を保持した脂質膜間における相互作用に関する研究
	工学部	助教授	高 橋 豊	アメリカ合衆国	マルチメディア情報通信ネットワークのシステム性能評価に関する研究
	農学部	助手	鈴 木 秀 之	アメリカ合衆国	細菌のエンハンサー (NTRC 結合サイト) で形成されるエンハンサー結合タンパク (NTRC) の多量体構造とその ATPase 活性の活性化による転写活性化の分子機構に関する研究
	農学部附属農場	教授	行 永 寿 二 郎	アメリカ合衆国・ドイツ連邦共和国・オランダ・フランス・スペイン	生理活性物質の栽培学的評価に関する調査研究
	農学部附属演習部林	助手	中 島 皇	カナダ	土石流の運動及び発生に関する研究
	人間・環境学 人 研 究 学 科	教授	海 原 徹	連合王国・オランダ・ドイツ連邦共和国	幕末維新期の海外留学生に関する研究 (松下村塾出身者)
	人間・環境学 人 研 究 学 科	教授	高 橋 義 人	ドイツ連邦共和国	ゲーテ自然科学に関する研究
	化学研究所	助教授	青 山 卓 史	アメリカ合衆国	形態形成に係わる遺伝子に関する研究
	防災研究所	助手	西 上 欽 也	アメリカ合衆国	コーダ波形のインバージョンによる地殻・上部マントル構造の不均質性に関する研究
	ウイルス研究所	助手	村 上 昭	連合王国	マウス胚における Fgf-3 遺伝子の発現調節
ヘリオトロン 核 融 合 研 究 セ ン タ ー	助手	別 生 榮	フランス	超高温プラズマの磁気平衡測定と閉じ込めの研究	
遺伝子実験施設	教授	清 水 章	アメリカ合衆国	分子生物学研究におけるコンピューター・ネットワーク活用に関する調査・研究	

2. 第1類第2種 (海外からの学者招へい)

海外から学者、研究者を本学に招へいし、学術活動の発展を図るとともに、本学との共同研究の基盤を固めるため、助成金(往復航空賃及び滞在費)を交付するもので、招へい区分は若手研究者(10カ月)及び一般(1カ月～2カ月)である。

区 分	受入部局	招へい学者名	国(地域)名・所属機関・職名	研 究 題 目
若手研究者	工 学 部	Alexander Melkoumian	ロシア・エレバン工科大学・助教	マルチレート・デジタル制御系に関する研究
	基礎物理学研究所	Yao-Zhong Zhang	オーストラリア・クイーンズランド大学・研究員	アフィン量子群の研究とその可解モデルへの応用
一 般	総合人間学部	Ching-I Peng	台湾・中央研究院植物研究所・研究員	東アジアにおける植物進化の研究
	理 学 部	A.I. Shushin	ロシア・科学アカデミー化学物理研究所・上級研究員	スピル化学に関する理論的研究
	医 学 部	Marshall J. Edwards	オーストラリア・シドニー大学・獣医学部長(教授)	物理的要因(高温・放射線)による脳発生異常の発症メカニズムとその予防に関する研究
	工 学 部	Giorgio Picci	イタリア・パドバ大学・教授	確率システムのモデリングと制御に関する研究
	農 学 部	Roehyati Joedodibroto	インドネシア・工業省セルロース研究所・パルプ研究所長	熱帯非木材繊維のパルプ化に関する研究
	医療技術短期大学	Alan Wittenberg	アメリカ合衆国・セントピーターズバーグ音楽療法センター・音楽療法士	発達障害児、精神障害者、痴呆老人に対する音楽療法の効果と作業療法への適応に関する研究
	胸部疾患研究所	Eklund Anders Gerhardt	スウェーデン・カロリンスカ研究所・助教	サルコイドーシスの免疫学的研究
数理解析研究所	Miles Reid	連合王国・ウォーリック大学・教授	3次元フリップに関する共同研究	

3. 第1類第4種 (大学行政上の渡航及び大学間協定校との交流)

総長及び総長が大学行政上特に必要と認めた者の海外渡航に対し、助成金を交付するものである。

所属・職名	氏 名	渡航目的国(地域名)	主な訪問先	派遣目的
総 長	井 村 裕 夫	ギリシャ、ハンガリー、連合王国	アテネ大学、セメルウェイス医科大学、ロンドン大学	高等教育及び学術交流に関する調査等
総 長	井 村 裕 夫	アメリカ合衆国	ブラウン大学	大学間学術交流に関する打合せ
庶務部国際交流課専門職員	本 田 佳代子	アメリカ合衆国	サンタフェ研究所、マサチューセッツ工科大学、カーネギーメロン大学	学術交流関係業務の実情調査
数理解析研究所所長(教授)(国際交流委員会副委員長)	荒 木 不 二 洋	イ ン ド	ビクヤン・バハワン会議場	井村裕夫総長の代理として、国際大学協会(IAU)第10回総会に出席及びインド国における高等教育・研究機関の実情調査のため
学生部留学生課第四留学生掛長	篠 田 春 代	フィリピン、台湾	センチュリーパークシェラトンホテル、台北国賓大飯店、中央図書館	1995年度「日本留学フェア」参加

大学間協定校との交流に基づく学者の受入れ又はセミナーの開催に助成金を交付するものである。

(学者招へい)

受入部局	招へい学者名	国名・所属機関・職名	研 究 題 目
文 学 部	Michel GRESSET	フランス・パリ第7大学・教授	第1次大戦後のアメリカ作家(特にフォークナー)の日本における受容の研究
経 済 学 部	Bernard CHAVANCE	フランス・パリ第7大学・助教授	社会主義経済の転換へのレギュレーション・アプローチ
人文科学研究所	Otto LADSTATTER	オーストリア・ウィーン大学・教授	唐代の言語と唐詩、及び中国仏教
人文科学研究所	Wolfram EILS	オーストリア・ウィーン大学・助手	近代日本の登山活動の社会学的研究

(セミナー開催)

申請者所属・職名	申請者氏名	開催期間	セ ミ ナ ー 名
京都大学一慶北大学校合同セミナー実行委員会委員長(経済学部教授)	中 村 哲	6.12.13～6.12.14	京都大学一慶北大学校共同学術シンポジウム「東アジア資本主義の構造—日本・韓国経済の可能性—」

平成7年度京都大学職員研修実施計画

平成7年度における研修実施計画は、次のとおりである。

なお、技術職員研修については、新たに技術討論会等が検討されている。

研修の名称	実施時期	対象	予定人員	研修場所	備考
新採用職員研修	4/10～4/13 (4日間)	新採用職員 (他機関を含む)	75人	国立若狭湾少年自然の家	4/10 附属図書館
主任研修	9/11～9/14 (4日間)	主任(他機関を含む)	70	国立曾爾少年自然の家	9/11 楽友会館
監督者(係長級)研修	11/28～12/1 (4日間)	係長(他機関を含む)	70	国立若狭湾少年自然の家	11/28 楽友会館
技術職員研修(第14回)	7/18～7/20 (3日間)	行(一)教室系技術職員 (他機関を含む)	50	附属図書館ほか	
〃(第15回)	2/6～2/8 (3日間)	〃	50	〃	
語学研修 (英語・初級コース)	5/9～7/14 (40時間)	事務系・技術系職員	16	楽友会館	週2回午後 1回2時間
〃 (英語・中級コース)	9/26～12/8 (40時間)	〃	10	〃	〃
実務講習会(庶務系)	10/2～10/5 (4日間)	実務担当職員	延べ 160	楽友会館	
〃(経理系)			延べ 160		
〃(施設系)			延べ 40		
〃(教務系)			延べ 80		

—京都大学の百年(第8回)—

吉田キャンパスへの道

京都大学本部構内、とくに時計台をめざすアプローチの大詰めは、東大路通りと東一条通り、そして白川道の交差点から東へ進むことになる。正面に朱塗りの鳥居と石燈籠、緑の松並木、吉田山、さらに大文字、如意ヶ嶽と、いかにも京都らしい景観を眺めながら左に折れ、明治26年(1893)に第三高等学校表門として建てられた正門に入る。この正門前の道路は、東一条交差点の東南角の石碑が「吉田神社参道」と表示するようにもともと吉田神社の参道なのである。碑文が「京都帝国大学総長松井元興書」であるのは、アプローチ道路を共用する吉田神社と京都大学との歴史的なかわりを象徴しているようである。

吉田神社は、平安時代の貞観年中(859～877)に、吉田二本松町つまり総合人間学部あたりに創建され、現在地に移ったのは応仁の乱が終わってまもない文明年中(1469～87)のことという。まず神楽岡東南の地に斎場所太元宮が、ついでその北方の地に春日造の本殿が4棟ならば本社がたてられたらしい。しかし江戸時代においては、吉田社といえは、斎場所太元宮のことであり、一方、春日造社殿のある一郭は「春日社」と呼びならわしていた。

ちなみに太元宮は、日本全国の天神地祇八百万神を合わせまつり、ひろく人々の崇敬をあつめていた。現在の建築は慶長6年(1601)の再建で、八角円堂に草葺の入母屋造の屋根をのせた、きわめてめづらしい姿をしており、国の重要文化財に指定されている。

このような社殿の構成を反映して参詣のための道も二筋ある。太元宮に通じる南参道と、春日社にい

たる「吉田神社参道」、すなわち表参道である。

16世紀前半の洛中洛外図屏風には、このころ「春日の馬場」とよばれた表参道が描かれている。神木である松のみごとな並木は、現在の景観の原形といえることができる。

しかし、実際に参詣人の往来の多かったのは、吉田村の中心道路でもある南参道であった。『拾遺都名所図会』（天明7年〈1787〉）では南参道の景観を大きく取り上げ、西端にある門と枳形、広い道に沿ってならぶ社家、太元宮や春日社の景観をリアルに描いている。

附属図書館が所蔵する洛中洛外絵図（天明6年〈1786〉）は、京大工頭中井家が作成した、当時としては正確な絵地図であるが、それによると、春日の馬場の南に接して、もう一筋の道が描かれている。新しい参道が整備されたらしく、このため「北の馬場」、「南の馬場」と区別されるようになった。南の馬場の東端に見える鳥居は、今の二の鳥居にあたるものであろう。なお、南参道に鳥居がないのは、参詣路としても日常生活の上でも大きな意味をもったことからすると不可思議に思える。

さて、北の馬場と南の馬場が一つの道になり、しかも「表」の参道と位置付けられるようになる変化は、いつ、どうしておこったのであろうか。その背景には、幕末の京都がひさしぶりに政治権力闘争の場となったことがあった。文久3年（1863）春3月にはおよそ200年ぶりに将軍の上洛が行われ、8月には公武合体派のクーデターにより尊攘派が追放され、そして翌元治元年（1864）7月には蛤御門の変、そして「鉄砲焼き」とよばれた大火災が勃発した。幸か不幸か、京都はふたたび政治都市になったのである。

政治抗争の中で土佐藩、長州藩、薩摩藩に伍してしだいに頭角を現してきたのが、御三家の一つ、徳川慶勝の尾張藩であった。元治元年（1864）、尾張藩は以前からあった下京天神山町の屋敷とは別に、新たに百万遍知恩寺の南に広大な屋敷を構えた。これが元治元年（1864）の「大成京細見絵図」に見える「尾州殿ヤシキ」であり、この屋敷地が第三高等学校をへて、京都帝国大学、そして京都大学の本部構内敷地としてひきつがれたのである。

尾張藩の邸が正面を向けた道路は、表通りというべき今出川通りではなく、白川道から「春日社」の参道にいたる、南方の名もない東西路であった。このとき屋敷の周囲の土居や空堀の築造とともに、四周の道路もあわせて整備されたのであろうが、それまでどちらかといえば脇道であった道路が、激動期の京都で活躍する有力者の本拠地に通じるメイン・アプローチとして、一躍脚光を浴びるようになったのである。

吉田神社はこうした環境の変化に敏感に対応したらしい。北の馬場と南の馬場を一体化して一筋の表参道とし、さらにその正面を飾り、かつ神域を示す境界の装置として新しく鳥居を建立し、その前面両脇に石燈籠を建てるなど、社頭の景観を整備したようである。「慶応元乙丑歳（1865）十二月」という日付がきざまれたこの石燈籠は、こうした変化を語る歴史の証人のように思われる。正門前の道とその景観は、まさに近代の胎動のなかでかたちづくられたといえようか。

（百年史編集委員会 高橋康夫）

訃 報

木次敏明 医学部附属病院助手

本学医学部附属病院助手 木次敏明 先生は、3月3日逝去された。享年41。

先生は、昭和53年京都大学医学部を卒業、玉造厚生年金病院、長浜赤十字病院に勤務され、同62

年本学大学院医学研究科博士課程を終えて、同年4月滋賀県小児保健医療センターに勤務、同年11月医学博士の学位を得られた。同63年より2年間の米国留学を経、帰国後、三菱京都病院に勤務され、平成3年本学医学部附属病院整形外科助手に就任された。

先生は専門が整形外科であるが、生体材料、中

でも人工骨に関する研究において優れた研究業績をのこされた。とりわけ、京都大学で開発され、現在人工骨として臨床で広く使用されているセラボンA-Wの基礎的な研究に寄与され、業績は国際的にも高い評価をうけている。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(医学部附属病院)

渡部 徹 名誉教授

本学名誉教授 渡部 徹 先生は、3月16日逝去された。享年77。

先生は、昭和17年3月京都帝国大学経済学部を卒業後、兵役に徴集され、戦後、京都大学大学院に進まれた。大阪経済専門学校教授を経て、昭和24年4月京都大学人文科学研究所助教授に就任、同44年9月教授、同56年停年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。

先生は、近代日本における各種社会運動の実証的研究に尽力され、『日本労働組合運動史』、『京都地方労働運動史』、『解放運動の歴史と理論』、『部落問題・水平運動資料集成』全5巻などを刊行された。

また、本研究所の特色である共同研究の指導においても、『米騒動の研究』全5巻、『大正期の急進的自由主義』、『日本社会主義運動史論』、『一九三〇年代日本共産主義運動史論』などの業績を残された。

この間、京都勤労者学園理事を務められるとともに、京都市同和地区の調査にあたられ、また、昭和48年本学に同和問題委員会が創設されると、以後停年に至るまで、その特別委員の任にあられた。

退官された後も、『近代部落史資料集成』全10巻、『部落問題事典』、『大阪社会労働運動史・戦前編』上下巻などの編集を指導された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(人文科学研究所)

岡崎 文彬 名誉教授

本学名誉教授 岡崎文彬 先生は、3月18日逝去された。享年86。

先生は、昭和6年京都帝国大学農学部を卒業後、本学助手、助教授を経て同25年農学部教授に就任、同47年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和34年10月から同38年10月まで農学部附属演習林長、同35年11月から同37年11月まで農学部評議員を歴任され、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、南九州大学教授に就任され、理事を兼任された。

先生の専門は林学、森林経理学と造園学、造園史で、なかでも西洋造園史の研究において数多くの優れた研究業績を残された。主な著書に『森林経営計画』、『森林とレクリエーション』、『ヨーロッパの庭園』、『造園の歴史』全3巻、『日本の古庭園』上・下巻等がある。

これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和55年には勲三等旭日中綬章を受けられ、平成7年京都府文化賞特別功労賞を受賞された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(農学部)

岩井 一義 医療技術短期大学部 名誉教授

本短期大学部名誉教授 岩井一義 先生は、3月27日逝去された。享年70。

先生は、昭和24年京都大学医学部医学科を卒業、三重県立医科大学助手、京都大学医学部附属病院助手、同医学部附属衛生検査技師学校講師、同附属臨床検査技師学校講師を経て、昭和51年京都大学医療技術短期大学部教授に就任、同63年停年により退官され、京都大学医療技術短期大学部名誉教授の称号を受けられた。

この間、京都大学医療技術短期大学部の設立に尽力されるとともに、初代衛生技術学科主任として創設直後の学科の整備運営に当たられ、今日の京都大学医療技術短期大学部の基礎を築かれた。

先生は、血液学及び内分泌学に関する基礎的並びに臨床的研究において数多くの優れた研究業績を残され、その発展に大いに寄与された。

また、日本内分泌学会、日本臨床病理学会、近

畿血液学会の評議員を歴任され、学会の発展に尽くされた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(医療技術短期大学部)

<部局の動き>

平成7年文学部博物館特別公開展示

文学部博物館では、3月24日（金）で平成7年特別公開展示を終了した。

展示内容、入館者数は次のとおりである。

期 間	展 示 の 名 称	入 館 者 数				
		一 般	学 生	職 員	特別観覧	計
3/8 ~ 3/24	ザンクト・ガレン 修道院の文化 日本古代文化の展開と東アジア	449	139	131	64	783

(特別観覧とは学術研究、視察その他博物館運営研究及び施設見学等である。)

日 誌

(1995年3月1日～3月31日)

- | | | | |
|---------|---|---------|---|
| 3月3日 | ウズベキスタン共和国 Shavkat Alimov 外務次官他2名来学、総長及び関係教官と懇談 | 22日 | ドイツ連邦共和国 ドイツ連邦教育科学研究技術省 Fritz Schaumann 事務次官他3名来学、総長及び関係教官と懇談 |
| 6日 | 附属図書館商議會
〃 放射性同位元素等管理委員会 | 〃 | 中華人民共和国 武漢大学 陶 徳麟学長他4名来学、総長及び関係教官と懇談 |
| 7日 | 評議會
〃 大学院審議會
〃 国際交流委員会
〃 国際交流会館委員会
〃 環境保全委員会 | 23日 | 修士学位授与式
〃 博士学位授与式 |
| 9日 | オーストリア共和国 ウィーン大学 Gunter Winkler 元学長（同大学教授）他1名来学、総長及び関係教官と懇談 | 24日 | 卒業式 |
| 13日～14日 | 入学者選抜学力試験（後期日程試験） | 28日 | ドイツ連邦共和国 ケルン大学 Ulrich Matz 学長他2名来学、総長及び関係教官と懇談 |
| 20日 | ドイツ連邦共和国 フンボルト財団 Manfred Osten 財団事務総長他1名来学、総長及び関係教官と懇談 | 30日～31日 | 特例入試 |
| | | 31日 | ドイツ連邦共和国 ボン大学 Reinhardt Lutz 事務総長他1名来学、総長及び関係教官と懇談 |

<コラム>

洛書

どのような科学であれ、研究や教育に専門があるのは当然である。同時にアダム・スミスが18世紀の後半に指摘したように、分業などを通じて専門化し、それによって発達した人間の才能を相互の交流によって互いの利益となるように活かすのは人間の基本的特性のひとつである。彼は、この関係を、「差異を共通の資産 (common stock) とする」と表現した（『国富論』第I部）。スミスは才能が人の職業を造るよりは、人の選んだ職業が才能の発達をもたらすと考える。例えばある人は学者の職業を選び、もう一人は石炭運搬人を職業とする。この分業の結果として、それぞれの才能が発達する。職業の成果である学者の知恵と石炭運搬人のサービスが交換されれば相互に利益がある、というわけだ。ポーターには知恵がつき、学者には暖房の素材が保障される。

現代では学者の間での分業も発達した。細分化されたとさえ言えるほどである。ところが、学者の間で分業の成果である専門的情報を相互に正当に評価し合い、相互の研究に活かすことによって「差異を共通の資産とする」方法については多くの意見があり、完全な合意を見るのは難しい。学際的研究の重要性が叫ばれる時代に残念なことではある。

最近、偶然の機会に川本隆史さんの『現代倫

理学の冒険—社会理論のネットワーキングへ—』(創文社)を読む機会を得て専門性と交流の関係について貴重な示唆をいただいた。氏によれば情報の相互交流を可能にするのは「人間に関わる何事も私にとって無縁ではない」という一貫した姿勢であるというのである。確かに、この書物は「人間にとって自由とは何か」を問い掛ける形で、J.ロールズの正義論から始って、J.ベンサム哲学、A.センの経済学、さらには生命論やバイオ・ポリティクスまで、相互の特徴や差異を「共通の広場(アリーナと言うべきか)」で交流させている。ここでは、

社会科学と専門性

—差異を共通資産にする方法—

自由生きようとする人間を原点として、この生き方に各専門性の成果がどのように貢献したかも検討しようという訳である。

池上 惇

従来、社会科学は価値判断からの自由を主張することによって科学になろうと努力してきた。同時に、科学を人間としての立場から自由な生活のために活かす視点も平行して検討する価値がある。そして、人間的自由の拡充のために科学を相互に活かす方法論もまた必要であろう。このような方法論は、科学を研究する人々がもつ知的な興味という要素に対して、人間的情熱の魂を吹込むことができるかもしれないし、さらには環境や文化と共生しうる新しい科学の成果をもたらす可能性にも期待しうる。

(いけがみ じゅん 経済学部教授)